

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

サンシュユ *Cornus officinalis* Siebold et Zuccarini (ミズキ科 Cornaceae)

3月、ようやく春めいてきた山里を歩くと、民家の庭などに黄金色の花をびっしりと枝一杯に付けた木を見かけます。ハルコガネバナ（春黄金花）とは、よく言ったもので、これがサンシュユ（山茱萸）です。中国及び朝鮮半島に自生し、日本には、薬用植物として伝えられましたが、現在では花木として庭園に植えられています。本植物は落葉小高木で高さ4mぐらいになり、枝は対生してよく茂ります。幹や枝の皮ははがれやすく、葉は対生で楕円形、葉脈はやや斜めにわん曲して平行に走り、特徴的な形をしています。小枝も葉も丁字形の伏毛が生え、脈腋には黄褐色の毛があります。早春、葉に先立って細かく分枝した小枝の先に散形花序をつけ、多数の黄色小花を開きます。花卉、雄しべはともに4個、雌しべは1個で秋になると、グミに似た真っ赤なだ円形の核果をつけます。この果実から種子を抜き、乾燥したもの（偽果の果肉）をサンシュユ（山茱萸, Corni Fructus）とよび、漢方では滋養、強壯、収斂薬として、六味丸（ジオウ、サンシュユ、サンヤク、タクシャ、ブクリョウ、ポタンピ）、八味地黄丸〔六味丸+（ケイヒ、プシ）〕、牛車腎気丸〔八味地黄丸+（ゴシツ、シャゼンシ）〕などに配合され、また、これを酒に浸けたものを山茱萸酒といい、強壯、強精薬として飲用されます。成分はイリドイド配糖体のloganin（ロガニン）、moroniside（モロニシド）、セコイリドイド配糖体のsweroside（スウェロシド）、タンニンのtrapain（トラパイン）、リンゴ酸等の有機酸が知られています。埼玉県越生町、越生梅林の近く、「田代三喜の生地」とされる所に見事なサンシュ



写真1 サンシュユ（春）



写真2 サンシュユ（秋）



写真3 サンシュユ（田代三喜の生地、春）



写真4 サンシュユ（田代三喜の生地、秋）

ユの木があり、毎年3月中旬に、実に綺麗な黄金色の花が咲き、秋には真っ赤な珊瑚のような実がなります。さて、田代三喜について説明しますと、三喜は室町時代後期の漢方医で1465年、越生町で生まれ、15歳で僧となり、1487年頃に明に渡り、僧医月湖に師事し、李東垣（りとうえん）、朱丹溪（しゅたんけい）の流れを汲む李朱医学（金元医学）を学び、1498年、多くの医学書を携え日本に帰国したとされます。帰国後、1509年に下総国古河に移り住み古河公方の侍医となり、数年後、武蔵に帰り、生まれ故郷の越生や河越（現在の川越市）を中心に関東一円を往来して医療を行い、多くの庶民を病苦から救い医聖と仰がれました。曲直瀬道三は三喜の弟子で三喜は道三をよき後継者として指導し、死期近い病床でなお口述を続けたとされ、道三によってその内容を書き留めたのを「涙墨紙」といい、三喜は1544年、79歳で没したとされています（他説あり）。